

論文の内容の要旨

論文題目 訳された近代——文部省『百科全書』の翻訳学

氏名 長沼 美香子

本論文の目的は、いまだかつて総体として本格的に読解されたことのない文部省『百科全書』という明治初期の翻訳テキストを研究対象に据えて、〈翻訳学〉の視点から探究することにある。広義の〈翻訳〉をメタファーとして曖昧に捉えるものではなく、また誤訳を指摘したり訳出物に評価を与えたりするものでもない。そうではなく、特定の翻訳テキストを同時代コンテキストに定位し、起点テキスト（原著）と併せて読むことで、歴史の曲がり角にあった日本の近代を翻訳の問題系から再考する試みである。それは言語論的転回のひそみに倣えば「翻訳論的転回」の主張であり、日本の近代を「訳された近代」として捉え直すことである。明治期は——この研究が対象とする文部省『百科全書』が訳された明治初期はとりわけ——近代日本語にとっての画期であり、このときの翻訳をめぐる出来事が現代に生きる私たちの思考にも奥深いところで作用しているのではないかと思われる。それは無意識のレベルに近い深層でのことだから、普段はあまり気づかれなないかもしれない。しかも翻訳という現象の常として、透明な不可視性を是とし、その存在を自ら見えなくしようとする力学もはたらく。

日本における翻訳論、とりわけ翻訳語と翻訳文体についての理論研究は、一九七〇年代から柳父章が先駆的に取り組んでいる。翻訳学という新たな学際領域が欧米を中心に萌芽した時期

と奇しくも重なるが、柳父の翻訳研究は日本という固有の文脈のなかで独自の思想を形成してきた。それは、私たちが自明としてきた日本語を疑い、その擬態を問い、翻訳論を通して私たちの深層にある思い込みに揺さぶりをかける。本論文では、文部省『百科全書』という翻訳テキストを読み解くために柳父の方法論を踏襲し、「日本語の事件」として近代日本の翻訳をとらえる。それはたとえば、翻訳語をその語源に遡ろうとする漢語研究とは手法を異にしており、近代日本において翻訳行為が遂行した「ことばの出来事」として翻訳の「等価」(equivalence)の虚構性をあらわにすることである。こうした翻訳へのまなざしを、明治初期の日本において文部省主導で行われた翻訳プロジェクト『百科全書』に向けると、そこにはどのような像が結ばれるだろうか。文部省『百科全書』の読解を通して、近代日本と翻訳の共犯関係を問い直してみたいと思う。

開化啓蒙期の近代日本が西洋諸国から多大な影響を受けた歴史的事実の自明性とは裏腹に、媒介となった翻訳の諸相は見えにくい。それは、等価に仮託した翻訳行為を無色透明のふるまいとして葬り去ってきたからだ。この隠蔽された翻訳のスキャンダルを暴き、翻訳とはいかなる出来事であるのかを問い、翻訳という言語行為の遂行性を明らかにしておこう。近代日本の文明開化とは何であったのか。本研究は、その不可視的側面を可視化する試みでもある。ここでの不可視性とは翻訳の謂いである。等価という幻に蔽われた翻訳行為の遂行性、それが近代日本と日本語に残した痕跡を文部省『百科全書』に探る。

私たちが無意識に想定している翻訳についての自明性が、私たちの用いることばの深層を蔽っている。翻訳というプリズムを通して日本の近代に向き合う試みは、翻訳を反射鏡として現代の私たちの思考に近代日本を映し出すことにもなるだろう。文部省『百科全書』という翻訳テキストを翻訳研究の視角から読解する意義はいま現在へとつながる。それはつまり、言語論的転回を経た西洋哲学の経験になぞらえれば、近代日本をめぐる思索はその根底で翻訳論的転回を要するものであり、この国の文明開化を近代日本語という翻訳語の出来事として直視することになる。

文部省『百科全書』は、英国ヴィクトリア朝に出版された *Chambers's Information for the People* を起点テキストとする翻訳テキストであり、文部省主導の国家的翻訳プロジェクトとして企図された。本論文では文部省『百科全書』をめぐる書誌情報も精査し、明治初期に実施された大規模な翻訳事業の全体像を丁寧に検証するために、公文書館、国会図書館、東書文庫、全国の大学図書館、さらには英国図書館などが所蔵する一次資料を地道に精査している。

論文の構成に沿って内容を簡単に紹介しよう。

序章では論文の目的と意義を明確にしたうえで論文全体の概要を示す。そして第一章では、「等価」を鍵概念として欧米の翻訳学史を再構築し、スキャンダルを介在して日本における翻訳論へとつなげる。日本の文脈で野上豊一郎と柳父章の言説を対比的に検討することによって、翻訳研究と等価をめぐる主要な論点の再考をすることで、本論文における等価概念の位置づけを明確にする。

第二章では、本論文が分析対象とする文部省『百科全書』というテキスト生成へとつながる翻訳機関の歴史的変遷を踏まえて、この国家的事業の輪郭を描く。明治初期に企図された大規模な国家的翻訳プロジェクトとしての全体像に焦点を合わせる次第である。明治政府の文明開化を翻訳という視点から捉えなおし、文部省『百科全書』に関係する史実、人物、書誌情報などを前景化し、後続のテキスト分析への準備作業とする。

第三章から第九章までは、文部省『百科全書』という翻訳テキストを総体として読解するために各章でテーマを設定して、以下のテキスト群へのアプローチを試みる。

天文学 気中現象学 地質学 地文学 植物生理学 植物綱目 動物及人身生理 動物綱目 物理学 重学 動静水学 光学及音学 電気及磁石 時学及時刻学 化学篇 陶磁工篇 織工篇 鋳物篇 金類及鍊金術 蒸気篇 土工術 陸運 水運 建築学 温室通風点光 給水浴澡堀渠篇 農学 菜園篇 花園 果園篇 養樹篇 馬 牛及採乳方 羊篇 豚兔食用鳥竈鳥篇 蜜蜂篇 犬及狩猟 釣魚篇 魚猟篇 養生篇 食物篇 食物製方 医学篇 衣服及服式 人種 言語 交際及政体 法律沿革事体 太古史 希臘史 羅馬史 中古史 英国史 英国制度国資 海陸軍制 欧羅巴地誌 英倫及威爾斯地誌 蘇格蘭地誌 愛倫地誌 亞細亞地誌 亞弗利加及大洋州地誌 北亞米利加地誌 南亞米利加地誌 人心論 骨相学 北欧鬼神誌 論理学 洋教宗派 回教及印度教仏教 歳時記 修身論 接物論 經濟論 人口救窮及保險 百工儉約訓 国民統計学 教育論 算術及代数 戸内 遊戯方 体操及戸外遊戯 古物学 修辭及華文 印刷術及石版術 彫刻及捉影術 自然神教及道德学 幾何学 聖書縁起及基督教 貿易及貨幣銀行 画学及彫像 百工応用化学 家事儉約訓

第三章は、私たちの身体所作を翻訳語から振り返る。「身体教育」から「体育」という近代日本語が成立する一方で、「スポーツ」の翻訳漢語が未成立であったことに着目し、「体操」「運動」という翻訳語と相俟って、近代国家のなかで国民の身体が規律・訓練されたことを明らかにする。

第四章は「言語」について大槻文彦の翻訳行為に光を当てる。日本初の近代国語辞書『言海』

の編纂者が、文部省『百科全書』に翻訳者としてかわり、辞書編纂と同時期に『言語篇』というテキストを訳していたことはあまり知られていない。文彦の翻訳行為によって何が遂行されたのかを、「言語」という根源的な主題のもとで論じていく。

第五章で扱う「宗教」は、明治十年代に成立した翻訳語であることは先行研究から明らかになっているが、これまで文部省『百科全書』の宗教関連のテキスト群が宗教学で注目されることはなかった。「宗教」という翻訳語は、逆説として非「宗教」を誕生させたのであり、靖国体制の鑄型が成立したことでもある。こうしたコンテキストのなかで、「宗教」がゆらぎながら立ち上がるテキストを分析して、その帰結を問う。

第六章は「大英帝国」という不可解なことばへと接近する。「帝国」という翻訳語が蘭学の訳語から英学へと受け継がれた結果、何が起こったのか。大日本帝国が範としたのは、果たして「大英帝国」であったのか。「帝国」ということばが今もなお更新され続けている理由を問い直してみたい。

第七章の「骨相学」では、近代のまなざしが何を視るようになったのかを論じながら、「神経」や「脳」から文学の語りまでを多角的に論じる。視ることの近代が文化を超えて翻訳されたのである。「科学」と「疑似科学」の近代が、「骨相学」的な視線とどのように交差したのか。

第八章で探究するのは、文部省『百科全書』の理系分野のテキストである。『百科全書』全体のおよそ半数を占めるこれら自然科学テキストの読後感には、近代英学の近世蘭学からの継承がまず浮上する。しかもその継承は一見すると見えにくくなっている。そこにはフィクショナルな離脱があったのではないか。

第九章では、文部省『百科全書』をめぐる制度の流通と消費という観点から、この翻訳テキスト全体を出版物として読み返す。そして、文部省『百科全書』を総体としてながめるなかで、第八章までのテーマで十分に扱えなかったテキストを中心に、近代の視覚と学問の制度化へと議論を開いてみる。

終章では、以上で論じた内容を振り返り、近代における漢語名詞としての翻訳語のふるまいを考える。最後に〈翻訳〉ということばにもこだわり、日本の近代化を再考するうえで翻訳論的転回の要請を主張して、文部省『百科全書』を読解した総括を行う。